

入管法改悪に反対して
あらゆる差別や抑圧に対し
反対の声をあげ続ける

START～外国人労働者・難民と共に歩む会～

千種朋恵

2021年3月6日、名古屋出入国在留管理局(名古屋入管)に収容されていたスリランカ人女性、ウイシュマ・サンダマリさんが亡くなりました。ウイシュマさんはDV被害にあったために留学生としての在留資格を失い、2020年8月に名古屋入管に収容されました。はじめは帰国を希望していたウイシュマさんでしたが、DVを受けていた彼氏から脅迫めいた手紙が届き、ウイシュマさんには帰国できない事情が発生しました。しかし、このことを名古屋入管の職員に伝えると「帰れ帰れ」とプレッシャーをかけられたのです。はじめは目立った病気もないウイシュマさんが、この職員からの帰国圧力をきっかけに体調を悪くしていききました。食べても吐いてしまい、体が衰弱し次第に歩行困難にもなりました。発作のように嘔吐を繰り返してしまいまともに話せないときもありました。ウイシュマさん本人からも、当時ウイシュマさんを支援していたSTARTからも、再三点滴をうつことを求めましたが、名古屋入管は点滴一本打たずに、ウイシュマさんを見殺しにしました。

この、ウイシュマさん死亡事件の背景にあるのが、2023年6月9日に強行採決された入管法改正案です。法務省一入管庁は2020年から入管法改正案を準備していました。その目的は、退去強制命令が出ているにも関わらず帰国を拒否する「送還忌避者」を日本から一掃することで、具体的には、難民申請者であっても強制送還を可能にする、帰国を拒否することそのものに刑事罰を与える、という内容を盛り込み、入管の権限をさらに強めるものです。

この、入管の何としてでも「送還忌避者」は追い返そうという動きのなかでウイシュマさんは帰国を拒否しました。その瞬間から、入管にとってウイシュマさんは帰国に従わない厄介者、邪魔者、何としてでも追い返す対象になったのです。ウイシュマさんが病院に連れて行ってほしいと頼んでも「帰国同意書にサインしたら病院に連れて行ってあげる」と言い、精神的にも身体的にも苦しめて「こんなところに収容され続けるのは耐えられない」とウイシュマさんが諦めて帰るまで収容を続け、結果見殺しにしました。

ウイシュマさんが亡くなった直後、入管法改正案の審議が始まりましたが、世論の強い反対を受け、政府与党は提出を取り下げました。2022年秋にも成立を狙いましたが、世論がおさまらないなかでもたも提出を見送りました。そして2023年、2021年に提出した法案と骨格はほぼ同じものを国会に提出したのです。

国会審議の際、入管法改正案の立法事実の根拠になっている難民審査参与員の発言が虚偽であることが明らかになったり、「送還忌避者」を各地方入管局で何件追い返すか、送還ノルマが出されていることが明らかになったり、様々な問題がありましたが、政府与党はまともに審議せずに強行採決を決行しました。

入管法改正案は、差別や人権侵害を助長する、排外主義を煽り、ウイシュマさんのように人の命を奪いかねないものです。私たちは、なぜ政府与党はここまで入管法改正案に固執するのか、全国に4000人いる「送還忌避者」を追い返すことが本当の目的なのか、財源確保法も成立された今、日本社会がどういう方向に向かっているのか、真剣に考えなくてはならないと思います。そして、入管法改正案が成立したから諦めるということはありません。ウイシュマさん死亡事件や今回の入管法改正案の動きを通じて、多くの人が当事者に関心を寄せ、大きく世論が動きました。2021年までは入管問題に関心は集まっておらず、誰も気づかないところでひっそりと入管法改正案を通してしまおうと政府与党は考えていました。

しかし、立法事実が成り立たないことや強行採決せざるを得ない状況まで追い込んだのは、差別・抑圧に気づき声をあげた市民の力です。今後、世論を維持、さらに強化し、当事者と共にあらゆる差別・抑圧に対して反対の声をあげていきましょう。

